

くわの 桑野遺跡石製アクセサリーの組み合わせ

国重要文化財である桑野遺跡から出土した縄文時代の石製アクセサリー類は、合計 85 点（^{つけたり}附として水晶原石 1 点が加わる）から構成されています。その多くは 24 基の土^{どこう}壇とその周辺から埋^{まいそう}葬当時に近い状況で出土しており、特に計 71 点もの^{けつじょうみみかざり}玦状耳飾は素材・製作技法などを対にそろえた事例が多くみられ、縄文時代の人々のオシャレや^{そうそうぎらい}葬送儀礼を復元するうえでとても重要な存在です。

栃木県宇都宮市の^{ねこやだい}根古谷台遺跡出土の対で構成された玦状耳飾と石製管玉がそれぞれ別々の土壇から発見されたことから、両者は別々に保有されていたと考えられてきました。しかし、桑野遺跡では、同じ土壇内に対の玦状耳飾と別種の石製アクセサリーが組み合う例が存在し、さらに、その土壇内における出土状況も並置、^{へいち ちようふく}重複など多岐にわたっています。

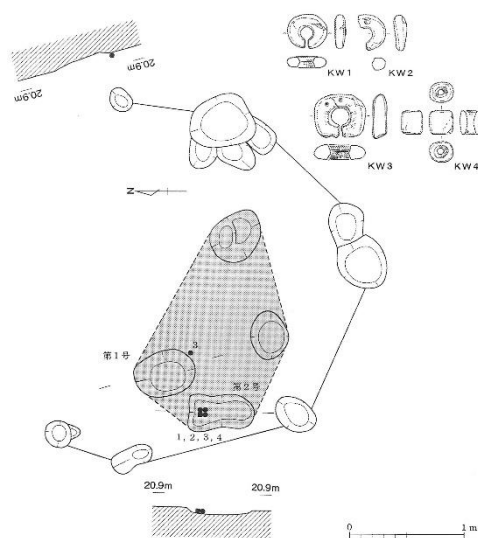
そこで、今回のミニ展示では、「桑野遺跡石製アクセサリーの組み合わせ」とのテーマで、その^{ようと}用途・用法が定かではない石器・石製品と、対で構成された玦状耳飾が組み合った例を中心に展示しています。すると、玦状耳飾の小型品と別種の石製アクセサリーが組み合う例が存在し、特に「^{いけいせつき}異型石器」とした、形状から用途が不明なものについても、検出位置からその用途を推測することができ、各玦状耳飾の様相と相関する可能性も生じてきました。

桑野遺跡から出土した石製アクセサリー類は、一体どのような人達が、どのように用いて日常を送り、その死後はどうなっていたのでしょうか。

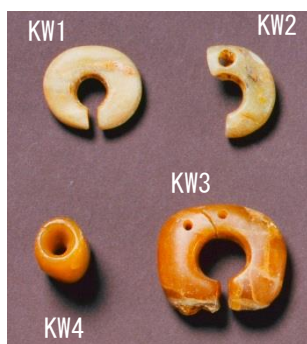
1. 異種の組み合わせ <玦状耳飾対品と首飾りほか>

1・2号土壇：4基の土壇が連結し、東側が先細りとなる長楕円形土壇（推 198 cm×推 124 cm）が想定されます。このうち2号土壇から玦状耳飾の完品（KW1）1点、玦状耳飾半欠品（KW2・3-1）2点、^{くだたま}管玉（KW4）1点が検出されました。1号土壇近くから出土した玦状耳飾の半欠品（KW3-2）1点が接合し、玦状耳飾は完品（KW1・3）2点、半欠品（KW2）1点となり、あたかも対構成を示しているようです。

しかし、完品は大きさに違いがあり、用いられた石材の色調も異なっています。大きい品（KW3）は、管玉（KW4）と同じ黄褐色の



第1図 1・2号土壇実測図

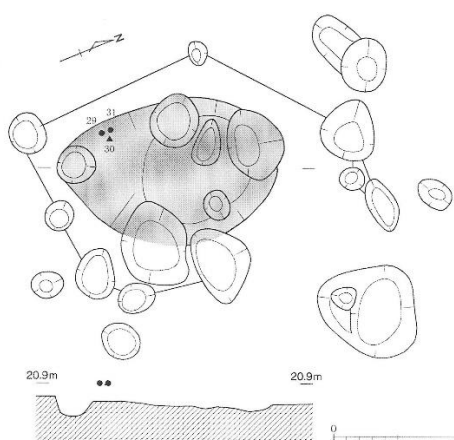


第2図 1・2号出土品

滑石であり、小さい品（KW1）は、半欠品（KW2）と同じ浅黄色の滑石が用いられています。

また、半欠品の切目部正反にある穿孔は、破面にも観察されます。管玉は、両面から穿孔され、長さとはほぼ同じです。

このように、1・2号土壌は玦状耳飾と管玉が組み合っていました。これまで玦状耳飾と玉は、分離保有が原則であり、被葬者の石製アクセサリーは厳密に区分されていたように考えられていました。ところが、1・2号土壌のみならず、後述する24号土壌も同様であったことから、再検討の必要があります。



第3図 13号土壌実測図

13号土壌：南方がとがった卵形土壌（192 cm×118 cm）のとがった方に偏し、軸線より西側の肩部より、玦状耳飾完品（KW29・31）1対、異型石器（KW30）1点が出土しました。3点は、それぞれ三角形の頂点に位置し、検出した高さはほぼ同じで、異型石器は土壌の内側寄りにありました。

玦状耳飾対品は、ともに滑石製の大型品で重量はほぼ同じです。ともに補修孔を有していますが、片方（KW31）は斜めに割れた破面を重ねて一穴を穿孔して接合していたようです。

3点のうち、安山岩製の異型石器の出土が玦状耳飾の対構成品よりも土壌の内側に位置していたことを重視すれば、首飾りではないかと推測することができ、用途が不明であった異型石器の使用法を示す一例と言えます。



第4図 13号出土品

2. 3点セット＜小型玦状耳飾対品＋頭部（額部）飾りほか＞



第5図 5号出土品

5号土壌：長楕円形土壌（178 cm×推 90 cm）の東北の肩部付近から、小型玦状耳飾完品（KW10・12）1対、鯉節形垂飾（KW11）1点の計3点が高さは異なるものの、直線状に並置する形で出土しました。

白雲母（マスコバイト）と緑泥岩（クロライト）製の小型玦状耳飾の対品は、相互に11 cm前後の間隔を保持し、滑石製の鯉節形をした有孔垂飾は、対品に挟まれ、上部凹部面に刺突文の施された部位を、上面とした状態で、玦状耳飾対品より約12.5 cm高い位置か

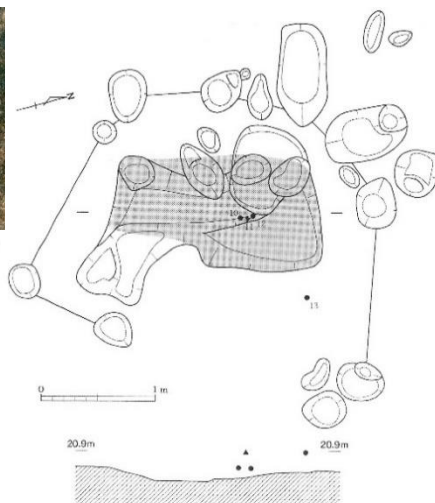
ら出土しました。

この3点の出土位置から鯉節形垂飾は「頭部飾」が想定されています。

このように立位で検出された例は、今回展示していないものの、26号土壙で単独出土した玦状耳飾完品1点も同様でした。



第6図 5号土壙
出土状況写真



第7図 5号土壙実測図

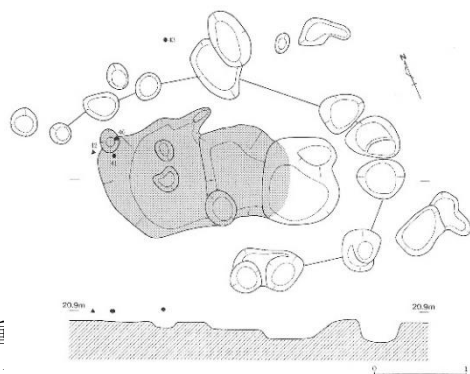
16号土壙：長楕円形土壙（推 205 cm×124 cm）の北東隅肩部、土壙長軸の北側より偏し、緑泥岩（クロライト）製の小型玦状耳飾完品（KW40・41）1対、安山岩製の異型石器（KW42）1点が出土しました。3点の位置は、13号土壙と同様に三角形を形成し、検出した高さもほぼ同じでした。しかし、異型石器の出土位置は13号土壙が玦状耳飾よりも内側であったのに対し、本例は外側に位置していました。

5号土壙と同じく、検出位置が頭部を示すものと考えられます。

また、玦状耳飾対品のうち、北方の（KW40）は、切目端部の片方が欠失しており、「片方優位」の例として適用出来る可能性があります。

5号土壙と16号土壙は、小型玦状耳飾対品と別種の石製アクセサリーが頭位を共有する例となっています。

第8図
16号
出土品



第9図 16号土壙実測図

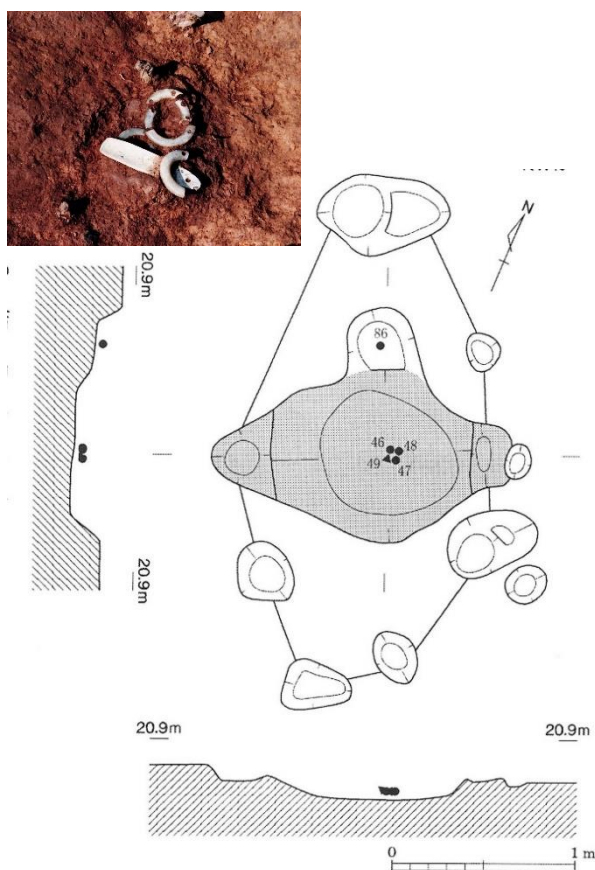
3. 玦状耳飾複数重複+篋状垂飾セット

18号土壙：付属ピットを三方に持つ隅丸方形土壙（110 cm×96 cm）の央部底面から玦状耳飾欠品（KW46・47・48）3点、篋状垂飾（KW49）1点が半ば重複して検出されました。また、北西側肩部の付属ピットの中から、水晶原石（KW86）1点も出土しています。

桑野出土篋状垂飾には大小があり、18号土壙出土品は20号土壙出土品に比べ大型ですが、横断面



第9図 18号土壙出土品

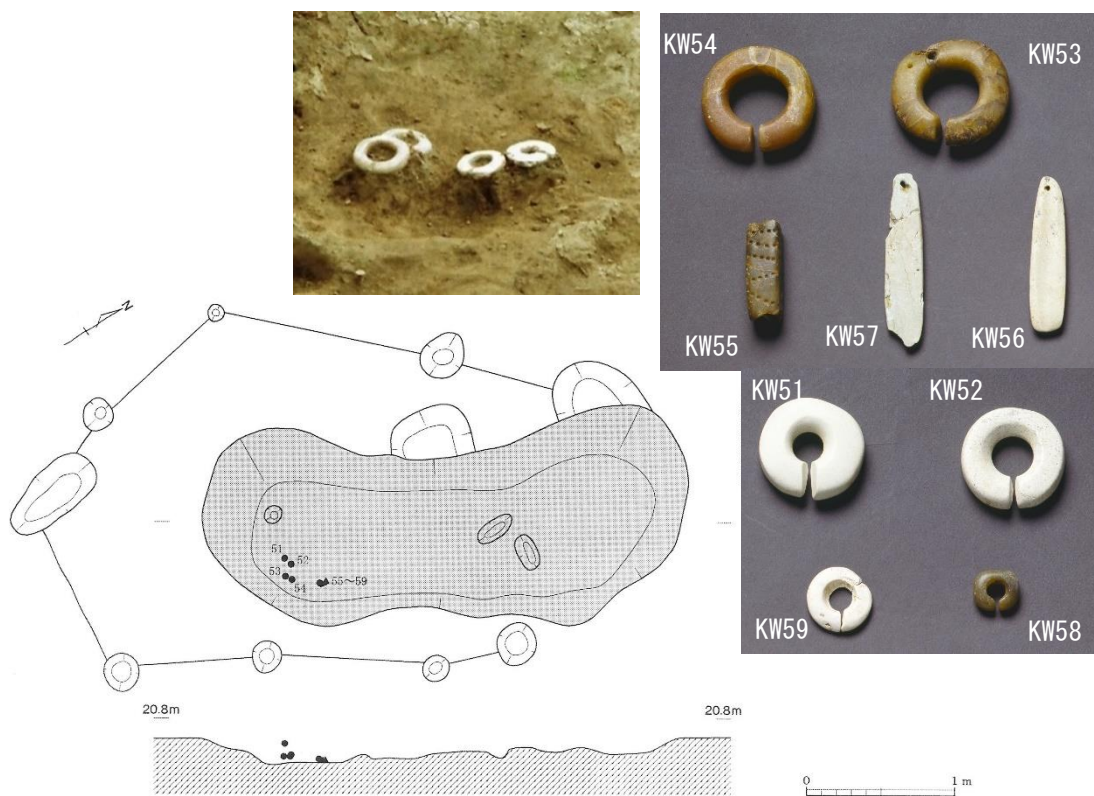


第10図 18号土壙実測図と出土状況写真

が窪む特異な形状は共通しています。篋状垂飾の用途について「髪飾り」「留め針」など、諸説がありました。しかし、出土状況が必ずしも用途を反映してはいないように思われます。

玦状耳飾は1対(KW47・48)が篋状垂飾に接して、並置もしくはやや重複気味となっており、対品より若干小型の玦状耳飾(KW46)がその下位から出土しています。玦状耳飾に用いられた石材は、白雲母(マスコバイト)製で、海外産と考えられている白色に近いネフライト製の篋状垂飾の形状とともに注意されている品となっています。

20号土壙：長楕円形大形土壙(324 cm × 148 cm)の南東隅で玦状耳飾完品(KW51・52・53・54)2対が近接して検出されました。しかし、2対の石材は異なり、



第11図 20号土壙実測図、出土状況写真、出土品

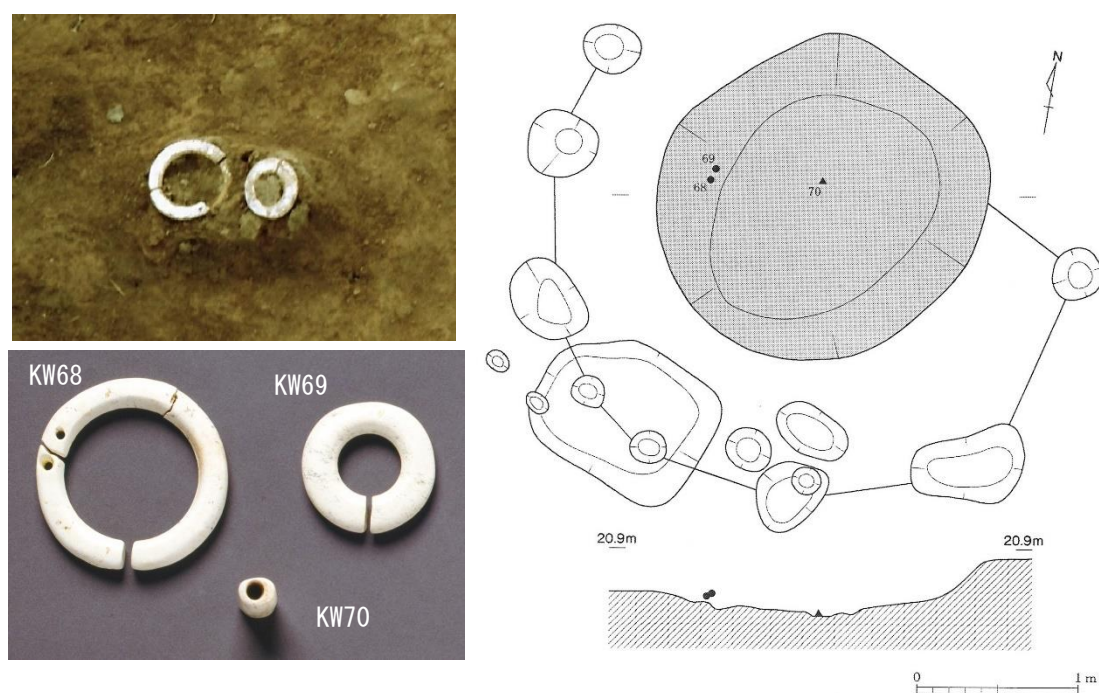
KW51・52 は白色のネフライト製、KW53・54 は黄褐色の滑石製です。また、KW51・52 が切目部をやや外側に向けて並置されていたのに対し、KW53・54 はやや重複気味に検出されています。そこから約 15 cm 北東の位置にも块状耳飾完品 (KW58・59) 2 点、篋状垂飾 (KW56・57) 2 点、管玉 (KW55) 1 点が一括出土しています。

20 号土壙出土の篋状垂飾は、18 号土壙出土例と比べると、ともに小さめですが、白色のネフライト製であることは共通しています。平面形は、「縄文の玉斧」と称せられた品と類似しますが、横断面は緩やかな U 字状に窪む特異な形状を呈する点で異なり、今のところ日本列島内では他に類例が見つかっていません。

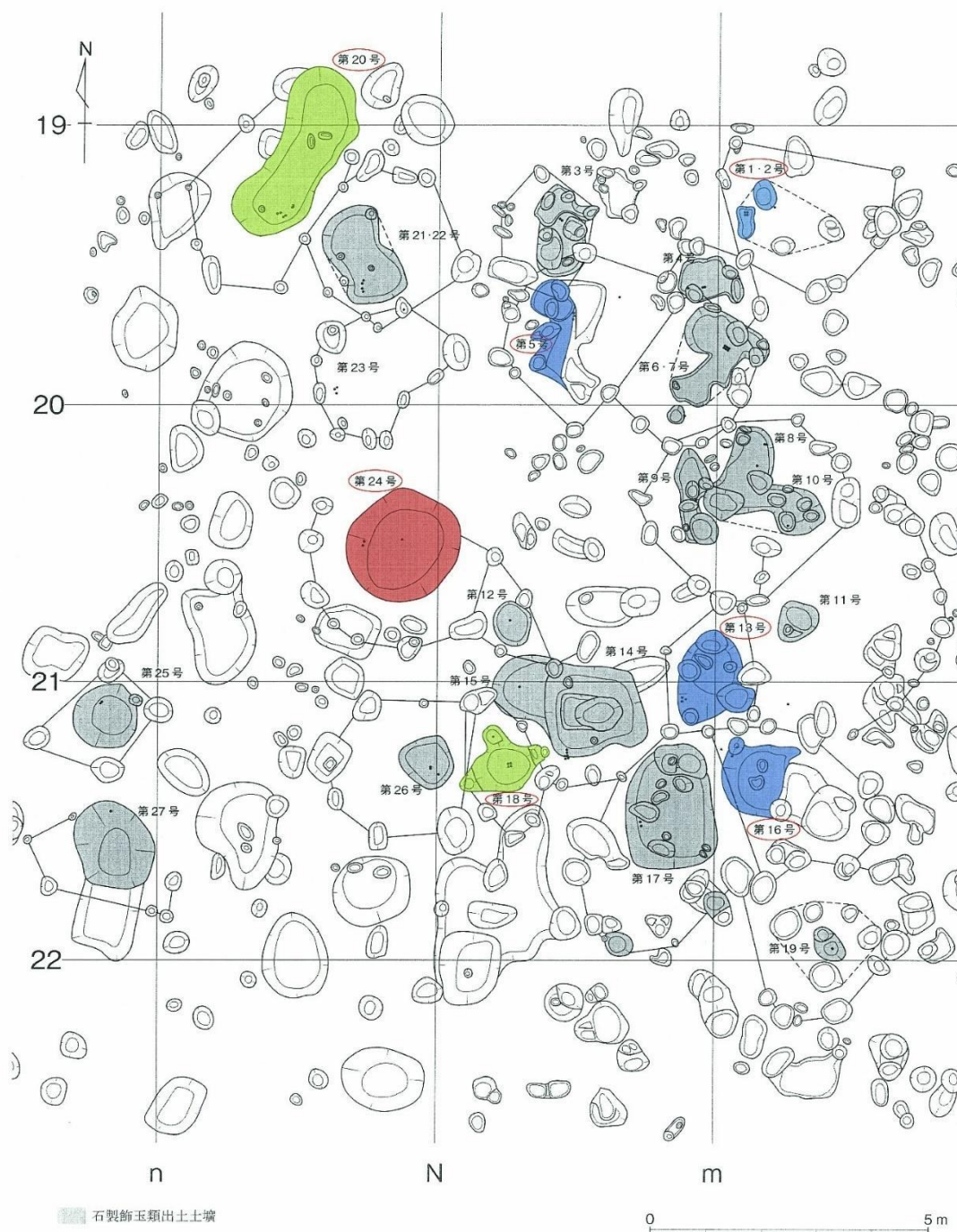
4. 块状耳飾大小+異種の組合せ

24 号土壙: 不整な円形土壙(206 cm×204 cm)の西側肩部下端付近に块状耳飾完品 (KW68・69) 1 対が近接し、やや離れた中央部底面最深部から管玉 (KW7070) 1 点が検出されています。石材は 3 点とも白色のネフライト製です。块状耳飾対品の切目部方位は相反し、両者の形状には大小があります。小形 (KW69) の切目部の作り方は糸鋸法いとのこほうが採用されたと思われます。その切断方向は中央孔から外側へ向かうと分析されており、ロシア・沿海州のチョルトヴィ・ボロタ遺跡出土例と同じと考えられています。

本土壙は、石製アクセサリーが検出された全土壙の中央付近に位置し、形状も円形に近く、大きいことから、集団の中心的位置を占めていたと想定されています。(橋本幸久)



第 12 図 24 号土壙実測図、出土状況写真、出土品



第13図 今回展示の縄文時代石製アクセサリ出土土壌の位置図

春季ミニ展示 桑野遺跡石製アクセサリの組み合わせ

展示期間 : 令和7年4月12日(土曜日)～5月11日(日曜日)
あわら市郷土歴史資料館 (0776-73-5158)